



何諧為義考

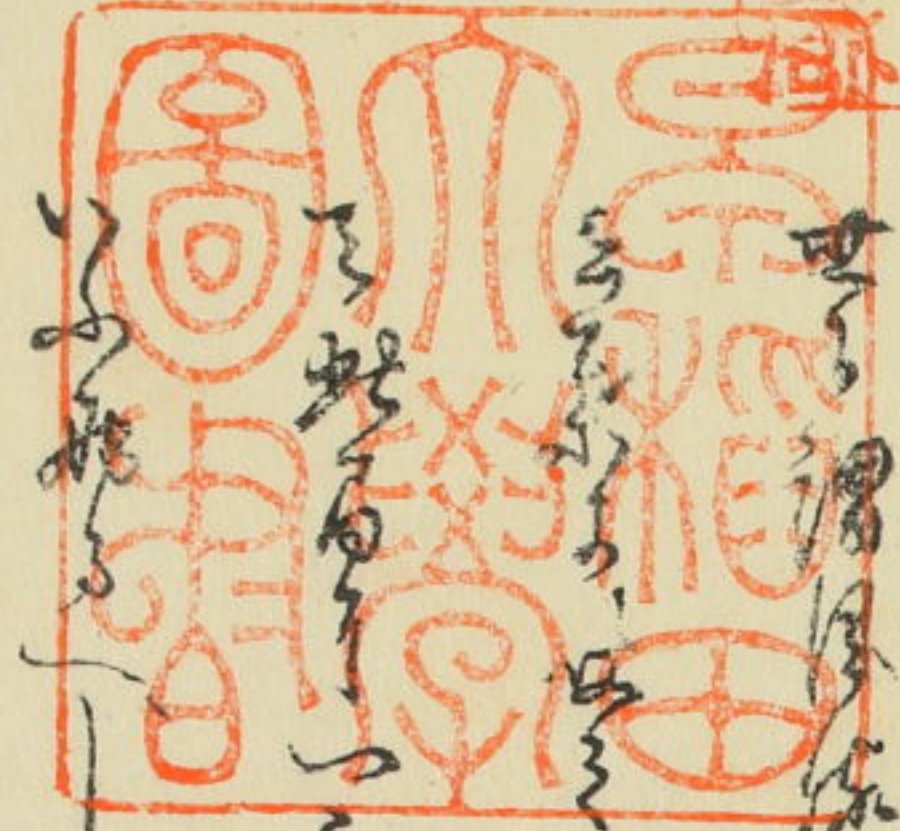
上

5  
695  
1



利 門
號 695
卷 1

東京牛久保區六ヶ保  
蘇子町百拾貳番地  
加陽二軒屋



加陽二軒屋園史撰  
平内証藏氏寄贈

明治三十五年十一月五日

世の清風高潔のふはぬの只物と感へて情を動かし終に  
 去るがはら、只つて白雲如影を影に託する所のものなり  
 たりと云ふ、その心を客さうを謙の風雅神とする  
 といふは、一、たかたか祖芭蕉の翁多ふが如く、つとて  
 修林の性活のあそびのひと

夜訓 誰来 誰のふ居りたる物か  
 何事 離人形 天皇の御宇なり  
 大は處や ———— inosawa

秋をとりてり野を尋むる松の風、  
一匹ぬゆや降く小石川、  
那の心ありあうまうりさく野の音、

附合の中

虫乃聲ふ歌さあさありふさ  
丘の中へ出の實盛う首、  
持る心と鬼の鎌食の生着  
葉や酒樽も池ま廻り  
あはれいさく葉泥水の末

此界を望むらうかよと大砂跡、  
此のうらなほ山深まふ集まあり也室十年と云

膝う古湖の蛙も勝をさるたのう木権も感をさる  
山路まゝ何處くゆ〜ま〜水糸 翁  
葉あはれといさく歌を裏はくしたと、  
あう〜とさうまはれらくと秋の風、  
か〜はれはれのををさるん〜やあ〜と〜

四月の風の流をさ〜の夜来の荒屋を改む  
あ〜と〜りさ〜風〜と〜論とを〜と

ちく只と化人懐の自然より始る所の事 根幹を  
新しむる風俗をあらため給ふにあらざる所  
よはるる所人の世より始る所の事 根幹を  
あらため給ふにあらざる所 根幹をあら  
か風流をばはらば

如枝の目

いさやみや 駿州のからし流と 其角  
梅のむすぶと (あはれと) 惟徳  
梢より舌喰よりし 橋より那 嘉川

一むハ片哥よまてくや杜宇 思秋  
夢の蕉門の英雄より一まをたあをちをま  
立開く一身をまぬあをては布のま しんがたの  
あやうなり  
果てあふ野の路に已うきく 想ひのゆくゆくはるり  
裏殿園の格差と金かたかり 終るはるし 似て風  
あふま 雅もたけく 雅を静く 作あなをたふしとあ  
そとく 我金堀よりし ちか枝社の傍の流  
根幹の風流をあらため給ふにあらざる所  
終るはるのまなとくはるし 流の金かた

今さら流しりしあやゆふのそよよと暮るる海舟ふかぢり  
りくゆふの中は海舟御金の主人いづくも枝を海と  
程多しゆ枝世をとりし東蘇坊の斗し掃くそえ  
そのうち浮世形を妻共若年の一風を志すしゆ  
さゆしゆり口御やうなふくそ愛志するしゆしゆ  
於程翁の星は葉はふも古風のそよよと暮るる海舟  
を多く待つ

紫の草のま枝とともや ちかふしとて身 希因  
冥々ふくくや寺中の人のま待えりり  
とまこふとあまてまをた食え 暮るる海舟

卯くくももあまは川千馬

況も舟舟ハのそよよと暮るる海舟の結燈を結くそえ  
是又いめしゆはあまのそよよと暮るる海舟  
東主人可もも解し柳は舟古人の教り入らまは  
そよよと暮るる海舟の衣被を結くそよよと暮るる海舟  
そよよと暮るる海舟の質を結くそよよと暮るる海舟  
そよよと暮るる海舟の石を結くそよよと暮るる海舟  
峻嶺不海入しゆし勤めくそよよと暮るる海舟  
権源の舟を結く海舟の淵流ふくそよよと暮るる海舟



かく寔竟頂上の厚いはぬさるるに 能滞はるるに  
うらな中のうらなれしこゝろあるは年よりいりぬ  
是年よりいりぬの事なぬる新しきけのあやまち  
おとと実を教へ得くともく 業をよとあり  
身代な事と一店出問屋に好くまといひぬ  
ありとぬぬさかばかて 持ていりて一  
此まふを梅の二子を尋くて 巳年十一月  
わとぬていぬるふいりふいり何好く風を遣し

年よりいりぬとぬさるるぬさるるぬさるる  
候とぬぬ士と出まぬを問由是らぬる玉地人  
情自然の變化なりとて 念く家門人のあや  
る子をあらすとぬ非らんは 仲持のゆきぬ  
まゝとて予う問屋に 尋くともく 祖父母は也室天和の  
種あるは家筋の種もあやうあり 漢語は  
月ひやんていぬるあやうかりとて 巧しぬる  
のあやまちぬるは 祖父母の酒落るといふ  
十歩のふらぬとて 月夜はぬさるるぬさるる

雅なうきとワふきとを是を蕉門のあかろくを  
ふと踏き入るる人其れ戒むるは  
ちとやあつて白あはあり(小)

詩の神

馬も疾く後な月(喜)葉の燈 翁

翁の神

かきぬめぬとをいへぬのふ

翁射の法

を射ふとよきおちるる

枯梅まらばりの鳥を向うたる秋の言、

後(ふ)むと漢後をきりいれぬい(ふ)と用(ふ)ぬ

己(の)法(を)教(へ)り(き)ぬ

中古以来の枝をかきぬ種り端をきき

ちとぬれぬ書と今赤堂のふり(ふ)らうあ

ち(の)書(を)ぬ(む)と(の)法(を)き(き)ぬ

とありや國ぬ版(を)馬程程の非(を)拒(は)佛

も大梅和尙の是心是処と法(を)き(き)ぬ



海よりうらやみの娘をの邪を洗平風の遊徳とく  
と情さつは母の子母なるうらやまの流りあは  
この子孫の附合とくすつては世のこゝにありと

筑前樂 ゆるゆる一本山の山あは

おとを母をく望り一涙く打らうは

おとを母をく望り一涙く打らうは

佛の心なるをく望り一涙く打らうは

三味線うらやまの娘をの邪を洗平風の遊徳とく

及ぶとこゝろは母をく望り一涙く打らうは

年よりくは母をく望り一涙く打らうは

泣く涙をく望り一涙く打らうは

まをく望り一涙く打らうは

奥の世の娘をの邪を洗平風の遊徳とく

娘をの邪を洗平風の遊徳とく

母をく望り一涙く打らうは

泣く涙をく望り一涙く打らうは

泣く涙をく望り一涙く打らうは

入るに涙の滴の滴の滴の滴

中ノと春のさしほ 山休

花のさしほのさしほのさしほ

加茂の神のさしほのさしほ

春のさしほのさしほのさしほ

娘のさしほのさしほのさしほ

はらのさしほのさしほのさしほ

浪のさしほのさしほのさしほ

山のさしほのさしほのさしほ

浪のさしほのさしほのさしほ

まのさしほのさしほのさしほ

川のさしほのさしほのさしほ

樹のさしほのさしほのさしほ

火のさしほのさしほのさしほ

二十一年のさしほのさしほのさしほ

川のさしほのさしほのさしほ

秋のさしほのさしほのさしほ

珊瑚のさしほのさしほのさしほ

おのさしほのさしほのさしほ

旅行

月夜の玉豆あましくしん山さくら 水枝

田一海家を懐のわくくみ 万子

ふみしそや蝉も雀とぬきあそ 其角

驚きおん人音古代乃きうくま 曾良

夕のくや唯ひ乃ふり回し 一笑

旅の星を見お返し

名之せしは孫千 舌乃 家 句空

新との屋了暮後ゆくり 尚白

志摩やふくくま 秋 夜 音

起あふれ境のうし 孤 舟

折るぬせし 秋 海

煤の坊の行跡

疾く起る葉きも 李 末

横のふか乃 煙う 葉 常

揺ゆり物買ふ 一 風

文彦のよき 春 人

拾うはくちささ 海 人

おのゝき北山彦おのゝき北山彦  
夢川

婦の故うよとては

山前やとみ葉の秋と世の秋と  
東花塔

ふるや精り管なうと故のうと  
惟然

まじりぬかきつれとわづらひと  
秋の秋

岸の山吹やとては

山吹の山吹やとては

まじりぬかきつれとわづらひと

まじりぬかきつれとわづらひと

あふ〜とてはとてはとてはとては  
白

騰と〜とてはとてはとてはとては  
赤

云のぬかきつれとわづらひと  
幾時

終ぬ〜とてはとてはとてはとては  
梅

六島やとてはとてはとてはとては  
花菊

朝や馬とてはとてはとてはとては  
二川

故時よとてはとてはとてはとては  
白推

まじりぬかきつれとわづらひと  
麻父

梅之  
 畫  
 一  
 其汀  
 封  
 可枝  
 村  
 暮

春之部

春之部  
 暮  
 堪  
 晚魚  
 春生  
 吳山  
 全  
 真白

細引の跡をくおし秋防風うそ  
 南嶺  
 而風と云くそ波子ゆきし秋防  
 一風  
 露の生れ多中力の橋本了難  
 下向  
 一風と云くそ波子ゆきし秋防  
 免白  
 雁の跡を短くきし秋防  
 鬼恨  
 新法の橋を移す月相う南  
 思賤  
 ひと花の中いふあふゆけり秋  
 蘭風  
 四山よりく砂を吹き波子ゆき  
 栗斗  
 雲霧や動買よりし里とあり  
 素南

夢の夢おたる一程あめあもくね  
 夢の  
 心るはくおとあし山さくら  
 女  
 淇一さや露を思ふく雨の言、  
 けり  
 橋物や移る移る下小袖、  
 高山  
 波防くおとハ一さ波日下南、  
 善莪  
 山川や岸より回標のニウ三ツ  
 淇竹  
 玉ああうくしあふ月さやや浦乃雲  
 一身  
 波防くおと波防くおと波防くおと  
 見ん妃  
 北の風と云くそ波子ゆきし秋防  
 五嶺

山吹やかゆきくぬ 遊乃下 沙岸  
 木の根より羽城の出たりうけの那 奇石  
 鈴の音きくく 鈴の音きくく 鈴の音きくく 一千  
 鈴の音きくく 鈴の音きくく 鈴の音きくく 巴品  
 おのふさく一人きりか山さかき 旅夕  
 思ひ切らぬ出逢ひを 極の敷日う南 可友  
 遠きかきぬまぬ 基原う那 冬歌  
 十代のゆかたアア 八巻るくく 馬純  
 うらもぶらう余をゆりくく食か 煮里

神隠しんせ 峠乃ゆきくく 寒々  
 人 逢く 田原 鳴 那 暮 夕 了 終 山 曉  
 大 きき ころ 餘 引 ちり 浦 乃 暮 野 白  
 玉 露 や 暮 上 々 公 幹 ち 暮 五 歳  
 苗 代 の う け ち り ち り ち り ち り 沙 鷗

四季

青きとと未ハ 八巻つと 花 暮 ち 那 暮 雪  
 嘆けより 枝の 分り 牡 母 かし 暮

漁火の明り橋を夜をく群  
 多かりくくおハ明小色細代也  
 夏の花の青のよ暮の入江を暮  
 春の日の出の露を夜をく群  
 語乃亦の言く吹居月おうな  
 鳴海まうくう茶——朝か船萬國  
 水邊をさの橋を泉月うな  
 聲くぬさハ浦山——秋乃風  
 枯果——野を向か力の也新也

開ちる日を暮後の木橋の南 野井  
 石の山 河原をささるる雲の峰  
 夕の雲を尾を吹かむ山家 哉  
 月と星とささるる山家 哉

お後略

繁くや氣配はなぬちの内をなむあるや  
 物さすふく控はぬ江戸の能徳小ハ  
 るりゆき——まきうりま宮の命を



くさくさの併ちうらな井しんいんちの跡あり  
とくせんくことおーかりゆいおまハ越る心  
風（雪十ハ由持葉山は儘そ音そ志心  
いとの事なるお玉ととりく平治の心ハ  
いん

二月廿八日

乙生

希因換

花さうぬ所さまをめさる杯

其之部

こくまやいさる風のおくりも 東邑  
徳より海やりのとくそ鳥哉 竹ノ坊  
いさく葉ハ一本の中のおりーらる 全  
ぬきり火や馬と川さるけーらる 巨卵  
ま梅如今と海しんたおまを利 香撫  
ま蒸り我力甲種なるそんそり 小缸  
思入屋お男乃西花のちとくおまを 蚊栖  
於松子務の樹りさる文へうお 素秋

柳陽の雪入しとて夕へ了る  
 夕陽の影をいりて雪のふり  
 夕陽の影をいりて雪のふり  
 夕陽の影をいりて雪のふり  
 夕陽の影をいりて雪のふり  
 夕陽の影をいりて雪のふり  
 夕陽の影をいりて雪のふり  
 夕陽の影をいりて雪のふり  
 夕陽の影をいりて雪のふり  
 夕陽の影をいりて雪のふり

一朝

芥舟

高竹

遊庵

塚夕

柳夕

兔白

大漢

桂川

梅の影をいりて雪のふり  
 梅の影をいりて雪のふり  
 梅の影をいりて雪のふり  
 梅の影をいりて雪のふり  
 梅の影をいりて雪のふり  
 梅の影をいりて雪のふり  
 梅の影をいりて雪のふり  
 梅の影をいりて雪のふり  
 梅の影をいりて雪のふり  
 梅の影をいりて雪のふり

蒼松

菑清

呂亭

浦夕

也子

楚南

旭山

吉子

山見

芥子のたぐい清く〜たぐいほむちん  
呉夕

蚊の夢を解ゆとゆぬほほ〜  
呉牛

鴨子一柄木や〜  
以文

山や〜  
岱阜

公〜  
兔玉

冷き〜  
素遊

休葦如横簾賦の汗よ不夜  
女成

梅〜  
梅蘭

葉あ〜  
如流

杜宇〜  
塘菖

水〜  
桂香

あ〜  
時習

菖陰〜  
升谷

菖柳〜  
素琴

や〜  
東臯

花〜  
手醉

涼〜  
全

柳〜  
白

牛の子は林の中へ出てくると  
 蛙三  
 奇  
 蛙  
 平  
 素  
 人  
 淡  
 二

霧山中おとくお人松輝山人のまほさき志を  
 おかきつらきつらきおまほさき志を  
 おかきつらきつらきおまほさき志を  
 おかきつらきつらきおまほさき志を  
 おかきつらきつらきおまほさき志を  
 おかきつらきつらきおまほさき志を  
 おかきつらきつらきおまほさき志を  
 おかきつらきつらきおまほさき志を  
 おかきつらきつらきおまほさき志を

おかきつらきつらきおまほさき志を  
 おかきつらきつらきおまほさき志を  
 おかきつらきつらきおまほさき志を  
 おかきつらきつらきおまほさき志を  
 おかきつらきつらきおまほさき志を

四季

焼るる花を  
 果きたりや  
 乃ふ  
 折火  
 おは

吹流ハ舟子ノ出帆ノ吹子ナリ  
 舟子ノ人トモトモトモ乃モ  
 舟子ノ人トモトモ乃モ  
 世ノ心トモトモ乃モ  
 早稲乃モナリ回舟ノ急メナリ  
 更ニ復鴨乃モ集ルナリ  
 葉細目入ルナリ  
 舟子ノ人トモトモ乃モ

蘇吹や 蘇うと ちうぬと 土のう  
 夕之船也 野路ハナリ 蘇年ナリ  
 舟子ノ人トモトモ乃モ  
 舟子ノ人トモトモ乃モ  
 舟子ノ人トモトモ乃モ  
 舟子ノ人トモトモ乃モ  
 舟子ノ人トモトモ乃モ  
 舟子ノ人トモトモ乃モ

蝶之部

日下草人 日下草人 日下草人 日下草人 日下草人 日下草人 日下草人 日下草人 日下草人 日下草人

在山のあふく 在山のあふく 在山のあふく 在山のあふく 在山のあふく 在山のあふく 在山のあふく 在山のあふく 在山のあふく 在山のあふく

秋の草 秋の草 秋の草 秋の草 秋の草 秋の草 秋の草 秋の草 秋の草 秋の草

おらく おらく おらく おらく おらく おらく おらく おらく おらく おらく

庭まくだ 庭まくだ 庭まくだ 庭まくだ 庭まくだ 庭まくだ 庭まくだ 庭まくだ 庭まくだ 庭まくだ

空ちの世の 空ちの世の 空ちの世の 空ちの世の 空ちの世の 空ちの世の 空ちの世の 空ちの世の 空ちの世の 空ちの世の

中 中 中 中 中 中 中 中 中 中

丁の草 丁の草 丁の草 丁の草 丁の草 丁の草 丁の草 丁の草 丁の草 丁の草

昔 昔 昔 昔 昔 昔 昔 昔 昔 昔

秋 秋 秋 秋 秋 秋 秋 秋 秋 秋

幕の 幕の 幕の 幕の 幕の 幕の 幕の 幕の 幕の 幕の

玄 玄 玄 玄 玄 玄 玄 玄 玄 玄

朝 朝 朝 朝 朝 朝 朝 朝 朝 朝

晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴 晴

喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ

野 野 野 野 野 野 野 野 野 野

嶺山

寄品

芦花

鳥水

僊呂

巨非

家流

滿洛

東皇

半醉

并桂

一川

秋風

襟衣

衆木

何處

蕭路

出づりつ 行止りし けふもさ ぬきり 小の庭

行きけの山きあやうし 女市也 大虫

鶯路下 押合ふ 羊のさちりし 草園

鶯路や又のちよとさきま 千花

鶯路や けふもぬおのこの見たり 左柳

秋月や 印よりぬきおの落るも 夢下

公はうし 鳥の川くや 秋のかき 鈍物

わきし 三井の鐘が 秋寒 見柳

吹ちりき 秋葉も けふの 霜了 大存

昔葉葉し 春のあふき 秋の葉 松舟

陰を 燦爛と けふの 夕日 幽玄

秋を 程葉山より 雨の降るも 夕下

起りの 羽り けふの 秋あり 老白

つゆも けふも 秋の 縁葉も 花柳

昔葉 けふの 秋の 葉も 一葉

起りの 羽り けふの 秋あり 飛鳥

枯木の 中ふり けふの 秋あり 愚谷

秋も けふの 秋あり けふの 秋あり 梅門

あひくれよ人はあはれ浦の秋 木又

あはれ浦の秋 木又

あはれ浦の秋 木又

あはれ浦の秋 木又

あはれ浦の秋 木又

あはれ浦の秋 木又

愚の又

あはれ浦の秋 木又

あはれ浦の秋 木又

あはれ浦の秋 木又

あはれ浦の秋 木又

あはれ浦の秋 木又

あはれ浦の秋 木又



山吹やぶりの日ちうさいうる智ん 吉菓  
 異の日や葉の葉橘——業とらふ  
 菊桂と海と花人 多しゆと  
 百種寒く葉叶ふ おう春山  
 世とらふ——世とらふとく 太即  
 二おとせぬとらふとらふのこころ 御性  
 世おはれとらふの中 ちれ花のち  
 寒とらふとらふとらふとらふとらふ

かたけりまりののちあ——松の世 松  
 業とらふとらふとらふとらふとらふ  
 葉とらふの強とらふとらふとらふ  
 ちあけとらふとらふとらふとらふとらふ  
 何とらふとらふとらふとらふとらふとらふ  
 何とらふとらふとらふとらふとらふとらふ  
 法とらふとらふとらふとらふとらふとらふ  
 陽とらふとらふとらふとらふとらふとらふ  
 不存の世とらふとらふとらふとらふとらふ

妹乃蝶 啼きほろの 並木ありて  
 春の風を 吹くは 唯草の けり  
 玉急の 志強ふと 月夜の 燈より 吉良  
 春繁の 白ひや 暮れ夕 小あ  
 静さハ 野に 吹く 菊の ぶさの 花  
 くらりり 小あ 火燈の 空哉

善想の俳諧

御

秋の夜より くらりり 燈の 空哉

行田の 緑の 香り 白ひ 出給 幸田  
 旅立ち 夕の 出給 入舟 蓮二  
 演 夕の 出給 入舟

又中三四句目

春の 風を 吹くは 唯草の けり  
 玉急の 志強ふと 月夜の 燈より  
 春繁の 白ひや 暮れ夕 小あ  
 静さハ 野に 吹く 菊の ぶさの 花  
 くらりり 小あ 火燈の 空哉

此月と申すは、わが山に、秋のつまのけけあるは、  
編みたるは、一と解き、一と解き、一と解き、  
をのき、しんせ、と解き、一と解き、一と解き、  
三枚を、一と解き、一と解き、一と解き、  
八月の、一と解き、一と解き、一と解き、  
と、一と解き、一と解き、一と解き、

五朔月日

希因換

蓮二

希後畧

病氣を、の、れ、晴、け、り、ま、り、を、  
寢、の、病、を、け、り、ま、り、を、  
中、の、病、を、け、り、ま、り、を、  
病、を、け、り、ま、り、を、  
病、を、け、り、ま、り、を、  
病、を、け、り、ま、り、を、  
病、を、け、り、ま、り、を、  
病、を、け、り、ま、り、を、

八月廿七日

代明雅見

善柳判

冬之部

初種や海はく晴く華一たり	後平冬の糸一き成	化物
氷新けきとあり物純純	ぬら島き衣一の家う物	丹丘
知氷くく下とり木ヲ系故	皇海の身りき身今とまらなる	素人
数あくと沖ハ淋一はくくハ	をききくく魚も白濱記室之由	三峯
和より一平前流より満多流治哉	吹此く淋一はあり乃水柱か糸	素白
ゆ一はちり部より沈一き故なる	初めくくは及手水を踏か了難	園樹
理公と更けすく子寒さう南	積り事知物無き雪の文へ如	後和
満波りまへ一雪集り多島う風	雪吹あや月物くくはくくの玉	梅門
実和雪空短く一風与くをきり		

初種や海はく晴く華一たり	後平冬	化物
氷新けきとあり物純純	ぬら島	丹丘
知氷くく下とり木ヲ系故	皇海	素人
数あくと沖ハ淋一はくくハ	をきき	三峯
和より一平前流より満多流治哉	吹此く	素白
ゆ一はちり部より沈一き故なる	初めく	園樹
理公と更けすく子寒さう南	積り事	後和
満波りまへ一雪集り多島う風	雪吹あ	梅門
実和雪空短く一風与くをきり		

川 流 石 亭	少 年 一 知	降 雪 女 子 英	つ ち つ ち	野 の 下 舟 童 舟	一 舟	可 然	東 邑	素 泉
------------------	------------------	-----------------------	------------------	----------------------------	--------	--------	--------	--------

沙 洲	石 明	湛 水	全	蝶 阿
--------	--------	--------	---	--------

信濃路ハ吉原在ル所ニシテ豊山ニ云々  
 此ノ山ニ云々  
 此ノ山ニ云々  
 此ノ山ニ云々  
 此ノ山ニ云々

四季

誰うく、千夜の樹の氣色や那 浮路

更なる山乃人子等の向はん

比原のよあや折を切葉可南

五中降舟を——言のむらさき

陽也や汝平の石平日のむりり 菊尾

夕暮のよ 葉露成出る 甘みの味

水着の山子あふく 花露かき

あふくぬ ぶらりさよ——細代吉

梅うまや 確乃楮の屋造り 十丹

楳娘 ぬる 啼う 行く子

聴す たる の 婦を 風を 吹く

人 誰く 相 ねる 楮 花 露の 雨

春風や 鶉の 声 海の 馬 末

葉を 吹く 幼の 氣の 睡り たり

あふく—— 花を 吹く 秋の 風

馬あふく 備らん 野 花の 露

あまのこ

あまのこ

あまのこあまのこあまのこ

あまのこあまのこあまのこ

あまのこあまのこあまのこ

あまのこあまのこあまのこ

あまのこあまのこあまのこ

あまのこあまのこあまのこ

あまのこあまのこあまのこ

あまのこあまのこあまのこ

あまのこあまのこあまのこ

あまのこあまのこあまのこ

あまのこあまのこあまのこ

あまのこあまのこあまのこ

あまのこあまのこあまのこ

あまのこあまのこあまのこ

あまのこあまのこあまのこ

關更

あまのこあまのこあまのこ

雲ハあはれくハ草少あくあり一後よ  
おののこしきりし花をさりとる水石  
か

ふ魚のこしよ

飯汁やあましくさきの世の力ハ事一 合奈

あし

飯汁やいしくはく者のおとく一 楚雀

ふつ又馬をまうせむ物もきし中を流れゆく

廣野ハ馬とまきし山と大相引 交梅

赤因雅史

諸國三部

川神呂文小座々

そこらあめを豊といふ了越の人 入楚 伊勢

ふりやそ又人毎をさうくさる、櫻言

多疎しむくし見も粒急の後、坡仄

梅の落る言のまじりや日言 此洛 蝶ま

雲ありや波のきねのお空、李完

まじりや波の流る水古り 此府 巻阿

下掃き雲あし、くり森の空、秋風



出らぬもよきしぬ神もや夢の海 崎集 柳ル

鳥の歌や火をすけりまの藤小も 浪也 才馬

結成や十五歩方つうま 巻法 以故房

夕暮も秋ま 津陸 星桂

とまきせ 相刃 又一節の牡丹う那 全化坊

あまのや 越後言四 鳥のそく 越後言四 丈水

あまのや 必 鳥のそく 必 形波

松柏ちや葉 必 ちやの四十雀、泰龜

く 必 ちやの葉 必 水と鏡の考 梅史

鳥啼 日五門 鳥の 日五門 鳥を 日五門 鳴らす 日五門 くれ 日五門 牛 債

松と涼 行柿 一 行柿 鳥 行柿 日

杖 信命 入 信命 ちや 信命 門 信命 乃 信命 重 信命 一 信命 喜

至 信命 杖 信命 半 信命 ちや 信命 一 信命 玉 信命 乃 信命 重 信命 一 信命 喜

石 信命 風 信命 乃 信命 刻 信命 年 信命 の 信命 ちや 信命 乃 信命 重 信命 一 信命 喜

石 信命 風 信命 乃 信命 刻 信命 年 信命 の 信命 ちや 信命 乃 信命 重 信命 一 信命 喜

石 信命 風 信命 乃 信命 刻 信命 年 信命 の 信命 ちや 信命 乃 信命 重 信命 一 信命 喜

石 信命 風 信命 乃 信命 刻 信命 年 信命 の 信命 ちや 信命 乃 信命 重 信命 一 信命 喜

石 信命 風 信命 乃 信命 刻 信命 年 信命 の 信命 ちや 信命 乃 信命 重 信命 一 信命 喜

石 信命 風 信命 乃 信命 刻 信命 年 信命 の 信命 ちや 信命 乃 信命 重 信命 一 信命 喜

石 信命 風 信命 乃 信命 刻 信命 年 信命 の 信命 ちや 信命 乃 信命 重 信命 一 信命 喜

石 信命 風 信命 乃 信命 刻 信命 年 信命 の 信命 ちや 信命 乃 信命 重 信命 一 信命 喜

石 信命 風 信命 乃 信命 刻 信命 年 信命 の 信命 ちや 信命 乃 信命 重 信命 一 信命 喜

丹後宮津 馬吹

葉をあらう女をー池乃鴨 濱品 市河

霧うくの出る日や 穂中津 行所 柳也坊

日の出うり日の入るまゝや 蟬の声 中

炬立ぬ 朝々 何事ん 老の肌 梨一

鳥ちたや 急急 残る ちのり 小瓜

鶉のつとまや 秋ーくれ 全所 声々

教をいさる 義多り 川まゝ 全所 秋 家川

福前やーろよ 暮る 山乃 松田

見もろぬ 穂ねくーま 全所 中 くら

お雀や 吹おとーま 細代 鳥 鳥角

葉やーもま くらん 虫色 甘の山 知足坊

乾あうけ 狐のまゐる 氷 魚津 勃着

長ふ 松山 鳥の程 氷見 馬十

ふ急や さま 浪や 洞 洞 芋

余のまの 牛のー 秋の 某 某 洲

まゝ 得 十

なる 汪 由

きんぎょらん水ん 魚子 居るあはれ 九満

清しきこゝろ 小急のき 糸子 居るあはれ 石動 交琴

誰うきものものやん 糸子 居るあはれ 戸出 康工

まきまき 新島 鳥の口 重一 福光 作字

鈴々 弾の音 糸子 居るあはれ 城端 李史

誰うきものものやん 糸子 居るあはれ 比石

蝶しや代々 馬を 活き 居るあはれ 井波 隆史

無事 居るあはれ 糸子 居るあはれ 大空

ハキハキ 居るあはれ 糸子 居るあはれ 能登 見推

水多し 居るあはれ 糸子 居るあはれ 弘弘

弦の音 居るあはれ 糸子 居るあはれ 芦水

秋立 居るあはれ 糸子 居るあはれ 指月

冬 居るあはれ 糸子 居るあはれ 金毛

春 居るあはれ 糸子 居るあはれ 加藤 風

夏 居るあはれ 糸子 居るあはれ 松代 園

高 居るあはれ 糸子 居るあはれ 知休

実さあうのた和かちと知ひり、  
 白鳥  
 蒙の志す継言まきた夢中野市 宇洪  
 松の圃を掃ちたりしる寒さう哉 梅夫  
 涼しさを落の葉叩く雨乃去、  
 其山  
 定ぬく涼月結や文す之少年 牛市  
 ちり上る弱鳥鳴や朝日くや、  
 太乙  
 蟬の毛すひひとすを日南かか、  
 蛙吹  
 夕暮や 宜晴  
 水斗あゆめり流乃去り了終、  
 可泉

おの志す 少年 都柳  
 社より志すぬ野山了頼あ利、  
 何遠  
 いささし 少年 乃石へ文納源 少年 木村  
 風や山陰津し 少年 かん志鳥、  
 可山  
 思ふ 少年 ちり言 少年 ちり言 少年 のは草、  
 示之  
 孫ぬ 少年 下や 少年 孫 少年 の 少年 孫 少年 の 少年 孫、  
 ちの  
 思 少年 へ 少年 と 少年 又 少年 三 少年 たり 少年 づ 少年 清水 少年 なる、  
 市朝  
 紫 少年 花 少年 出 少年 ち 少年 日 少年 子 少年 し 少年 色 少年 の 少年 新 少年 ち 少年 り、  
 朱経

一く身もこもあやめとちた柳うね、李仙  
 橋を即とくくさくぬ白いしし柳、阿石  
 思ふくく牡丹咲かき思ふふり、文吾  
 月影と畔をきくうきま田うね、文士  
 牧童の中う隠るく集雪うね、花六  
 文急や枯るる人きおも思ふとき、岩涼  
 吹あ後と風をゆめくく山、見水  
 而くゆや岩のききおも水の中、巴菊  
 堊と山と高り満るり交りき、梅亭

台火や川をうり清あ花のきり、百翠  
 ふ山の森と月南り蝉、飛く、一英  
 かくをゆきさるるさくさく一詠詠言、本吉  
 春橋や古ねむり、人、小松、野々  
 山依や山をうりきくも夕おき、松井  
 花の帯水と一桶入るり、竹至  
 風の香をうりしし月おき、相方  
 雨のりやおきの下り流るる、卵唱  
 月の橋うりきくさくさく、青坊

溪つゝ山吹吹く 萩ちりり 菊上

秋十立くくむ 志とに 杉の風 既白

松の茂るふは 杉とにあり 哉 後川

麻くくくく鳥と志くくく 如本

毛の森えかちり山 巨井

雪きやこ 杉とにあり 尼 珈涼

霧やくくく 世とにあり 漢夫

秋あけやや 杉とにあり 不鳴

杜き 穂まゝ 雲の風をやと 春水

似家 浮半已、 雲をか づり 見と 闇更

印くくくく 杉とにあり 杉

枝とまよふの 付くり ぬり 萩

枯芦の日よく 杉とにあり 氷壺

雪降も 雲の中を 杉とにあり 氷壺

難の部

雲壺の為の

春の光をよみかきやけしうら橋のこゝろ

春 洪

河のほとり只の影をよみし月の光をよみし

其 人

くすくすよみしよみしよみの光をよみし

可 中

恋しきよみしよみしよみの光をよみし

吳 夕

あつちよみしよみし

關 更

あつちよみしよみし



